

13. 短報

1. 佐藤久先生の訃報

外邦図研究にご協力いただいた佐藤久先生（東京大学名誉教授）が2020年3月23日に亡くなられた。先生の略歴（東京大学理学部広報 11 巻 6 号 [1980 年 3 月]）によれば、先生は1920年4月1日にお生まれとのことで、満100歳直前であったことになる。

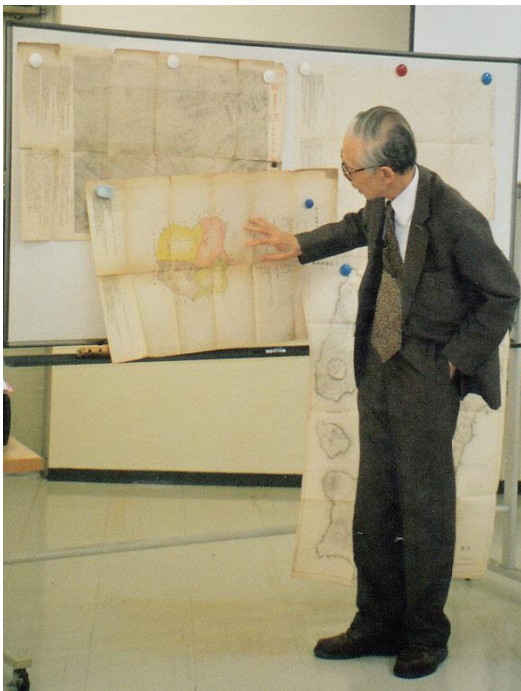


写真1: 講演中の佐藤先生（日本地図センター2004年11月27日）

本誌には外邦図研究会でのご講演（写真1）を元に「地図と空中写真、見聞談：敗戦時とその後」（3号：61-71）、「地図と空中写真、見聞談：敗戦時とその後（続）」（4号：45-68）をご寄稿いただいたほか、そのエッセンスを「終戦前後の地図と空中写真、見聞談」（326-351頁）として、多くの写真とともに『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域：「外邦図」へのアプローチ』（2009年刊）に掲載させていただいた。先生は終戦前後の時期には東京大学理学部地理学教室の大学院生で、終戦前後の同教室や陸地測量部の状況についてふれていただくとともに、「兵要地理調査研究会」

にも参加されて、『終戦前後の参謀本部と陸地測量部：渡辺正氏所蔵資料集』（2005年刊）を補う証言を残してくださいました。

先生のこれらの記事は、第2次世界大戦時における地図と空中写真、さらには軍隊と地理学者との関係についての貴重な記録であり、今後も参照されることが望まれる。

2. 今村遼平氏訳『中国地図測量史』の刊行（2014年12月）

外邦図研究には中国の地図作製史の参照が不可欠で、『中国測繪史』編集委員会編1995『中国測繪史、第二巻（明代至民国）』（北京：測繪出版社）はハンディな書物として参照されてきた方は少なくないと思われる。北京に滞在していた大堀和利氏が同書を見いだされ、『中国測繪史』より、民国政府の測量・地図作成事情（『地図』38巻 {2000} 4号 22-30頁）で、同書のうちとくに民国期の地図作製について紹介された。

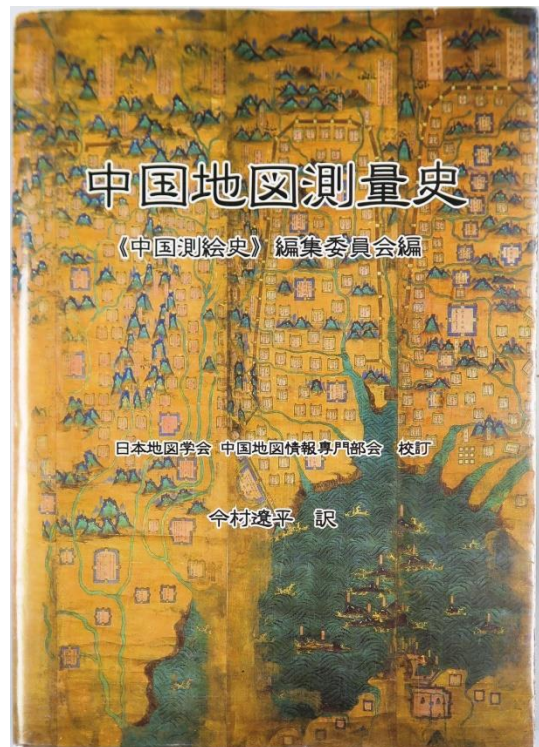


写真2: 今村氏訳『中国地図測量史』

その後同書を収録しつつ『中国測繪史、第1巻第2巻』、『中国測繪史、第3巻』が2002年に測繪出版社から刊行されて全巻が完結したが、この『中国測繪史、第1巻第2巻』のうち第1巻（先秦時代～遼・金・元代）および第2巻第一篇（明代）と第二篇（清代）の邦訳として今村遼平（訳）・日本地図学会中国地図情報専門部会（校訂）『中国地図測量史』（今村遼平、2014年刊、xvii+702+4+8+19頁）が登場した（写真2）。すでに齊藤忠光氏による書評（『地図』53巻[2015]1号）がある。全訳出版販売の許可は得られているが、部分訳のため私家版として刊行されたというが、よくぞこのような訳書を刊行していただいたと思っておられる方は少なくないであろう。とくに清代については、中国側の近代化へのうごきだけでなく、西欧人による中国縁辺部の探検や測量について、現在どのように考えられているか示されて興味深い。

3. 牛越国昭氏『対外軍用秘密地図のための潜入盗測』全4巻の刊行完結（同時代社、2015年11月）

牛越国昭氏の『対外軍用秘密地図のための潜入盗測』については、これまで本誌7号（2010年）、9号（2012年）で紹介してきた。以後第3巻となる『同、第3編、村上千代吉の測図活動、外邦測量の実際（中）』（全512頁、2014年10月刊）、『同、第4編、村上千代吉の測図活動、外邦測量の実際（下）』（全544頁、2015年11月刊）と完結することとなった。

既に紹介した第1編では、本シリーズの主人公村上千代吉（1879-1938年）が測量技術者になるまでの日本の外邦測量がレビューされ（～1899）、第2編ではその台湾への渡航、臨時台湾土地調査局の雇員（1900年2月～）としての活動にはじまり、日露戦争期の臨時測図部での陸地測量部雇員、さらには陸地測量手（1907年～）としての朝鮮半島・中国大陸での活動、さらに少人数での清国駐屯軍司令部付外邦測量班での本格秘密測量への

従事を追跡する。

これにつづく第3編では、第一次大戦中の臨時測量班員としての活動（1914年～）から、支那駐屯軍司令部付の外邦測量班の秘密測量（～1918年）からシベリア出兵にともなう臨時測図部での活動、さらに再々度少人数の秘密測量への従事（1920～1925年）を描く。最終巻の第4編では、1926年以降の日中合同測量などを描くが、1929年に陸地測量師への昇任に引き続いてすぐに退職して嘱託とされた点は興味深い。そのころはまた空中写真測量に関連する業務のほか、トランシットの使い方の学習も行って、秘密測量が時代遅れになっていたことを感じさせるが、1931年まで断続的に秘密測量を行っている。以後も1938年まで参謀本部で図工として働いたようであるが、どのような業務をしたのか興味深いところである。

村上千代吉の日記に沿いつつも、当時の政治的・軍事的状況の変化に触れて、この大変な長編を完結されたことをまず喜びたい。この4巻の書物は、今後外邦図を考えるに際して必ず参照されることになろうが、他方で、なお不明な点の多い外邦測量の記録としての村上千代吉の資料を考えると、その公開がやはり必要なのではないかと考えられる。

4. 小林茂編『近代日本の海外地理情報収集と初期外邦図』の刊行（大阪大学出版会、2017年2月）

2002年の久武哲也・今里悟之両氏の調査以来、アメリカ議会図書館・同国立公文書館収蔵の外邦図と空中写真については、断続的な調査をつづけてきたが、これまでほとんど検討されていなかった明治初期から日清戦争開戦までの時期に集中して、とくに1880年代の日本陸軍将校による中国大陸と朝鮮半島の旅行による測量原図を取りあげたのが本書である。この時期の資料は、陸地測量部の設立以前のもので、終戦時にアメリカ軍によって接収され、以後研究者のあいだにほとん

ど知られておらず、予想外の期間を要したが、測量原図ならびにそれによる「清国二十万分一図」の目録なども付して刊行された（写真3）。

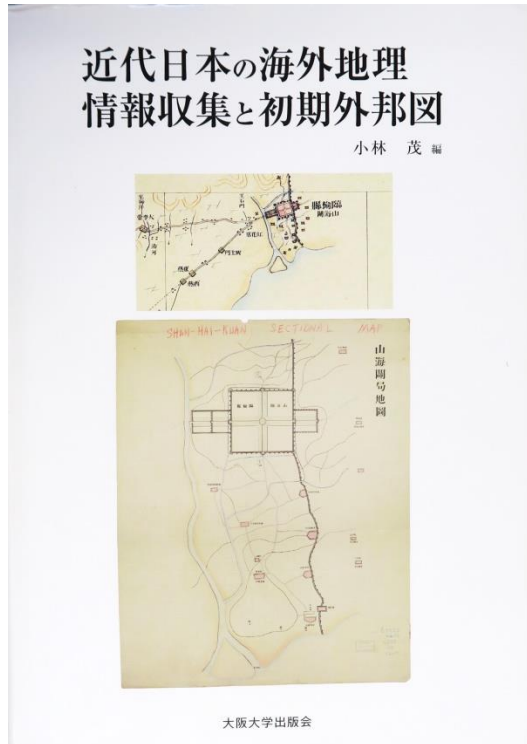


写真3:『近代日本の海外地理情報収集と初期外邦図』

今後は、この成果をふまえ日清・日露戦争期以後の外邦図作製に関する本格的研究が要請されている。とくに重要な図のカラー画像は口絵に掲載しており、またインターネットを通じて公開している「アメリカ議会図書館蔵、初期外邦測量原図データベース」とともに参照していただきたい。

5. 片山剛氏編『近代東アジア土地調査事業研究』の刊行（大阪大学出版会、2017年2月）

近代の土地調査事業については、世界のどの地域でも土地所有の確定だけでなく、売買・相続等によるその変動の把握にもとづく土地税の徴収、さらには大きな資産としての土地の金融的役割の保証といった多面的な役割を考慮する必要がある。ただし、世界各地におけるその展開の把握というような作業については、あまり考慮が払われてこなかった。またこれまでの外邦図研究では、

土地調査事業でつくられる地籍図にとくに関心を集中しつつ検討を進めてきたが、その範囲を日本およびその植民地に限る必然性はどこにもない。むしろ近代の東アジアで進行した土地調査事業を、相互に影響し合うものとしてとらえ、それぞれの地域での展開を多角的に検討するような作業が必要とされる。

中国史学者の片山氏が編集した『近代東アジア土地調査事業研究』は（写真4）、上記のような視角から近代の中国大陆で進行したこの種の事業を、首都南京に焦点を当てながら現場レベルにまで掘り下げて検討する。

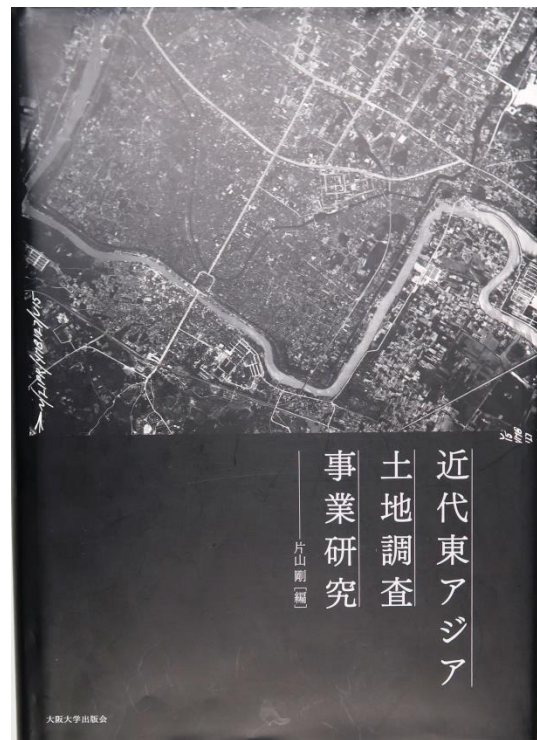


写真4: 片山氏編『近代東アジア土地調査事業研究』

今日残存する関係書類や簿冊、地図類の土地調査における役割を特定しつつ位置づけ、実務的なプロセスにアプローチする。このプロセスは残念ながら日中戦争で中断されることになるが、当時の社会と土地利用に対する従来の研究にない視角を提供している。なお表紙はアメリカ軍撮影の南京の空中写真（アメリカ議会図書館蔵）。

6. 松岡資明氏『公文書問題と日本の病理』の刊行（平凡社新書、2018年10月）

日本経済新聞文化部に勤務されていた松岡資明氏は、本号の1. 研究開始までの経過でも触れたように、日本の公文書行政に一貫して関心を寄せられ、また「国立公文書館の機能・施設の在り方等に関する調査検討会議」（老川祥一座長）の構成員としても活動してこられた。

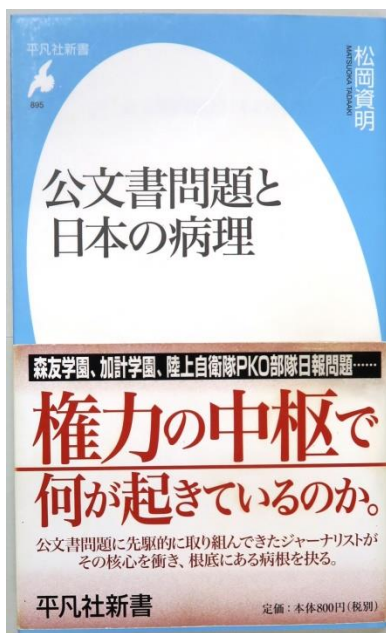


写真5：松岡氏『公文書問題と日本の病理』

本書（写真5）は相次いだ公文書に関連する問題を冒頭でとりあげられながら、その保存や公開の社会における役割を強調されている。外邦図に対する関心も深く、公文書としての意義をもつ資料のひとつとして取りあげていただいた。大学で研究教育に当たる場合、まず学術資料として外邦図を位置づけることが多いが、これにくわえて今後はそうした枠組みを超えた多彩な活用を考えていくべきと考えられる。

7. 小林茂（著）・林詠純（訳）『外邦圖：帝國日本的亞細亞地圖』の刊行（2019年4月）

2011年に刊行された『外邦図：帝国日本のアジア地図』（中公新書2119）の中国語訳（ただし繁体字版）である（写真6）。外邦図が描いている地

域は日本以外の領域であり、そうした地域に住む人びとにも読まれることを期待して、上記新書は執筆されたので、本来の希望の実現でもある。

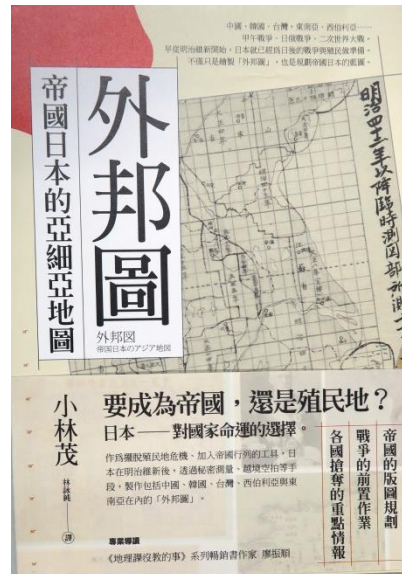


写真6：繁体字版『外邦圖：帝國日本的亞細亞地圖』

外邦図はこれらの地域では日本の「侵略の証拠」と考えられる場合が多いが、それぞれの地域の理解にとって学術的資料ともなることが徐々に理解され始めていることが感じられる。台湾の新北市、光現出版の刊行である。

8. 山岡光治氏著『地図作りを支えた技術者たちの道：測量・地図150/2年史』の刊行（オフィス地図豆、2019年7月）

明治100年を記念して刊行された『測量・地図百年史』（日本測量協会、1970年刊）から50年が経過して、この方面の150年を考えようとする書物が登場した。『測量・地図百年史』は、同時期に刊行された『気象百年史』（日本気象学会、1975年刊）、『日本水路史』（日本水路協会、1971年刊）とならんで正史のような雰囲気のある書物であるが、外邦図作製のような海外での活動は、十分に触れられたとは言いがたい。気象でも戦時期の日本陸海軍による観測については同じような欠落感がある。私たちの外邦図研究はそうした不足部分を埋めていこうとする動きであるが、明治150年というコンテキストのなかで地図作製技術

者の活動を追跡するのがオフィス 地図豆刊の本
書で、15+700 頁の大著である（写真 7）。

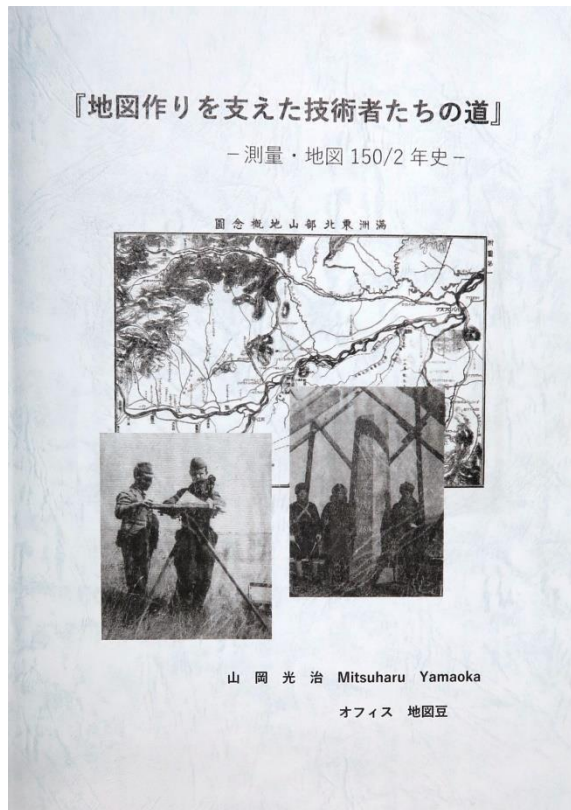


写真 7: 山岡氏『地図作りを支えた技術者たちの道』

短い「はじめに」につづいて、つぎのような章
で構成されている。

- 第 1 章 お雇い外国人に学ぶ日本人測量・地図技術者
たち
- 第 2 章 兵部省・民部省などの測量・地図事業（明治
初年～明治 7 年）
- 第 3 章 全国三角測量を目指す内務省の測量・地図事
業（明治 7 年～明治 17 年）
- 第 4 章 陸軍省参謀局から参謀本部へ（明治初年から
明治 10 年）
- 第 5 章 参謀本部による測量・地図事業（明治 11 年
から明治 20 年）
- 第 6 章 参謀本部から陸地測量部へ、そして日清戦争
へ関与する（明治 21 年から明治 36 年）
- 第 7 章 日露戦争への関与から、初の国境測量に対応
する（明治 37 年から明治 45 年）
- 第 8 章 つかの間の平穏から第 1 次大戦への参戦ま
で（大正元年から大正 15 年）

第 9 章 山東出兵から太平洋戦争開戦前夜（昭和元年
から昭和 16 年）

第 10 章 太平洋戦争開戦、そして陸地測量部の終焉
（昭和 17 年から昭和 20 年）

第 11 章 占領下の地理調査所（昭和 21 年から昭和
27 年）

第 12 章 国土地理院へ、そして測量機器開発と航測
業の発展（昭和 28 年から昭和 35 年）

おわりに

これからわかるように、本書の記述は 1960 年頃
で終わっていて、『測量・地図百年史』のカバー
する範囲と重なる。こののちについては国土地理
院より書物が刊行されるとのことで、副題に
「150/2 年史」とあるのはそれを配慮してのこと
いう。

なお本書が私家版のような形での刊行となっ
たのは、商業ベースに乗らないからとのことであ
るが、地図に関する書物がこれだけ発刊されてい
ることを考えると、残念である。地図ファンには、
本書のような硬派の地図本にも目をむけていた
だきたいものである。

9. 完結が近づいてきた山本晴彦「帝国日本の気象 観測ネットワーク」シリーズ

山口大学の山本晴彦氏は 2014 年に『帝国日本
の気象観測ネットワーク：満州・関東州』（農林
統計出版刊、『外邦図研究ニューズレター』12 号
に紹介）以後、つぎつぎと他の地域や機関の気象
観測について書物を刊行してきた。既刊のものは
下記の通りである。

- I 満州・関東州（2014 年刊）、II 陸軍気象部
（2015 年刊）、III 水路部・海軍気象部（2017
年 1 月刊）、IV カラフト庁（2017 年 6 月刊）、
V 南洋庁（2017 年 12 月刊）、VI 台湾総督府
（2018 年刊）、VII 朝鮮総督府（2020 年刊）

旧植民地をふくむ海外の諸地域の戦前・戦中期の
気象観測体制の形成と観測データの残存状況に
ついて資料を集積している。



写真 8 : 『帝国日本の気象観測ネットワーク』シリーズの表紙

この中には、現在使われていないデータを含むものが多い。地球環境問題の深刻化が議論されている現在、近い過去に行われたこれらの本格的な観測の成果が利用されないままになっているのは、それがもともとおもに戦争や植民地統治のために行われたものとはいえ、大きなデータの欠損を抱えたままのアプローチが続いているといっ

てよい。もちろん戦争やそれにとまなう破壊により失われたデータもあるが、これからの作業によってレスキューできるデータも少なくない。現在刊行準備中のものはVIII中央气象台で、順調な発刊が待たれるが、これらが完結して、日本の気象観測の戦後処理にむけた準備が整うといってもよいであろう。